

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 27 日現在

機関番号：62501

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21320128

研究課題名（和文）洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究

研究課題名（英文）Combined Study about The *Scenes In and Around Kyoto Screens* National Museum of Japanese History Version A

研究代表者

小島道裕 (KOJIMA MICHIHIRO)

国立歴史民俗博物館・研究部・教授

研究者番号：90183805

研究成果の概要（和文）：

(1) 現存最古の洛中洛外図屏風（16 世紀前期）について、デジタル技術を用い、関連する絵画などの比較などによって、制作当初の図像や色彩を想定した復元複製を制作することができた。(2) 描かれた事物について、歴史、民俗、美術などの各方面から検討を加え、さまざまな問題について新たな知見を得ることができた。(3) デジタルデータを元に、タッチパネルによる拡大や比較、描かれた 1426 人の人物検索データベースなどの仕組みを作り、展示やホームページで活用した。

研究成果の概要（英文）：

(1) About The *Scenes In and Around Kyoto Screens* National Museum of Japanese History Version A, 16th Century, we succeeded to make a replica which shows as they may have looked when they were first made by digital technique. (2) Studied the picture from several field such as History, Folklore, Art History, and cleared the meanings of many things which painted in the picture. (3) To use in the museum exhibition and web site, we developed the enlarge and compare system of pictures, and the database about the 1426 persons painted in the picture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
2010年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2011年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
総計	13,900,000	4,170,000	18,070,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：(1) 資料 (2) 絵画 (3) 洛中洛外図屏風 (4) 画像分析

(5) 復元 (6) 複製 (7) デジタルアーカイブ

1. 研究開始当初の背景

洛中洛外図屏風歴博甲本（旧三条家本、町田本。以下「歴博甲本」）は、現存最古の洛中洛外図屏風として著名である。しかし、これまでの洛中洛外図屏風研究は上杉本に著しく偏っていたため、歴博甲本独自の研究は必ずしも盛んでなく、一般的な解説や初期洛中洛外図屏風の中での比較はあっても、専論はほとんどない状態であった。しかし、2007

年の国立歴史民俗博物館における企画展示「西のみやこ 東のみやこ—描かれた中・近世都市—」を契機とした研究から、基本的な成立事情について有力な仮説を提示するに至り、描かれた人物の特定や事物の解釈も進んできた。制作年は 1525 年、発注者は細川高国、作者は狩野元信と推定され、多くの人物像が固有名詞で語れることなどが指摘されている（小島道裕「洛中洛外図屏風歴博甲

本の成立と初期洛中洛外図屏風諸本』『国立歴史民俗博物館研究報告』第145集、2008年）。

歴博甲本は、しかし右隻第二扇に大きな欠失（後補）の部分があり、また全体的に画面の破損・汚損がかなりあるため、本来の画像についての理解が妨げられていた。これを復元した複製を制作することは以前から検討され、岩永（藤江）てるみ氏は、第二扇の欠失部分について、制作者の立場から復元を試みている（藤江てるみ『「洛中洛外図屏風歴博甲本右隻第二扇」についてのオリジナル部分の現状模写及び後補部分の再現』東京芸術大学大学院、2000年）。

岩永氏の復元は、描かれた祭礼・建築・人物等について、画像の定量的な分析を踏まえた、客観性を持つ研究であるが、その妥当性については、未だ各分野からの検討を経ているため、一案にとどまっていた。これについても、図像研究の水準が上がり、またデジタル技術による画像処理が容易になったことで、組織的な復元研究を進める条件が整ってきた。

歴史・美術分野のみならず、材料分析やIT技術の研究者をも含めた共同研究体制により、また国立歴史民俗博物館におけるこれまでの実績を踏まえて、画像データ加工による試行錯誤を行うことで、蓋然性の高い復元を行うことが可能である。

復元という共通の目標を掲げて図像研究を行うことは、各分野からの研究を焦点を合わせて進展させる効果が期待でき、また絵画をどのように分析し、どのような手続きで復元していくかという作業自体も、すぐれて研究的な営為である。

そして、成果として制作された復元画像は、展示や教育普及活動の素材として活用することが可能である。

2. 研究の目的

本研究は、現存最古の洛中洛外図屏風である「歴博甲本」について、各分野からの協業によって、資料としての標準的な理解を確立するとともに、欠損や汚損部分や褪色についての復元的研究を行い、デジタルデータによる画像加工によって、実際に制作当初を想定した屏風を作成しようとするものである。各分野の研究者が読み解いた画像の解釈や、材料分析・図像復元試行などの成果を持ち寄り、一つの対象を復元という共通の目的のために共同研究を行う点に特色があり、その過程で、絵画資料の研究としても、復元技術の上でも、これまでにない様々な知見がもたらされることが予想される。すなわち、画像復元をひとつの目標とするという作業自体が、さまざまな分野に波及する先端的な研究である。

洛中洛外図屏風は京都の事物を詳細に描

いた絵画であり、歴史資料としても大きな価値を持つものであるため、その研究の進展は、美術史のみならず、政治史、社会史など多くの分野に影響をおよぼし、新たな課題を生み出すことになる。

そこで、各分野からの参加を求めて共同研究体制を組織し、「歴博甲本」に描かれた内容についての標準的な理解を形成し、かつ各分野での「歴博甲本」を資料として用いた研究の活性化を図りたい。

歴博甲本は、4種ある初期洛中洛外図屏風の祖本として位置づけられるため、その解明には他の諸本との比較検討が必要であり、歴博甲本のみならず、初期洛中洛外図屏風全体の研究を進展させることともなる。

また、最新のデジタル技術を用いて復元複製という形で成果を形にし、その過程の情報を公開すること、そして、博物館という実際にその復元複製が展示され利用に供される場における活用プログラムに至るまでの開発を行い提示することは、今後行われるであろう同種の研究や制作、そして絵画資料の利用に対して、裨益する所が大きい。

3. 研究の方法

(1) 歴博甲本の個別画像を、政治史、社会史、民俗学などの各分野から詳細に検討し直すことで、その意味を解明して標準的な理解を形成し、また欠損・汚損部分について、内容面からあるべき画像の復元を行う。

(2) 本来の色や形としての画像については、材質等をはじめとするさまざまな分析や、個別画像の蓄積と比較による経験的な試行によって特定し、適切なデジタル画像の処理と出力によって、復元複製を完成させる。

(3) 完成した複製品は、その妥当性について展示による評価を行い、また、その制作品および作成したデジタルデータを用いて教育プログラムを試作・試行し、その可能性と有効性を検証する。

4. 研究成果

(1) 「歴博甲本」の復元研究

当初目的とした、「歴博甲本」の制作当初を想定した復元複製については、これをいったん完成させて、実際に屏風の形に表具し、企画展示で公開することができた。

作業としては、スキャナーによる原本からのデジタルデータの取得と、その修正による現状複製の作成、そしてそれをベースとした画像の復元と色彩の復元を行ったが、いずれの段階においても、検討を重ねる過程で多くの知見や作成のノウハウを得ることができた。

特に復元に際しては、原本の詳細な観察によって、残された内在的な情報を読み取ることと、他の洛中洛外図屏風や関連する絵画資

料から、比較が可能な対象を探して検討を重ねることで、かなり蓋然性の高い復元を行なうことができた。もとより完全とは言えないものだが、制作当初を想定するためのひとつの基準となる案として、意義のあるものと言えよう。

(2) 描かれた画像および社会的背景の研究

画像の復元については、特に欠損部分について、どこまで正解であるかはともかく、上述のように今後の検証に供するための具体的な案を示すことができたが、欠損部分以外についても、多くの参考画像を検討し、また現地の景観や、発掘データによる知見、および文献史料や他の絵画資料から確認できるさまざまな事物の実態について、文献、考古、民俗、有職故実など、それぞれの分野からの報告を得ることで、理解を大きく前進させることができた。これらは、それぞれの分野において、さらに新たな課題となるものであり、また洛中洛外図屏風自体の研究においても、相互比較や時系列的な系譜関係を念頭に置いた検討を行なったことから、描かれた事物の問題だけでなく、制作と需要の問題にも踏み込んで考察を行なうことができた。

次項の活用と関連した画像研究としては、「歴博甲本」に描かれた人物について、性別、身分・職業、服装、場所などの情報を記述してデータベース化した。各項目について言語化を行なったことは、あまり例のない大きな成果であり、今後の同種の作業にひとつの標準的な例を示したものと言え、また、描かれた人物の数自体も 1426 人と、これまでの説より大幅に増加した。

(3) 活用についての研究と実践

画像データの活用については、タッチパネルによる超拡大自在閲覧装置のデータを更新し、さらに画面を 2 分割して、「歴博甲本」の復元複製と現状の比較、および「歴博甲本」と「歴博乙本」の同じ場面を比較できるシステムを開発した。これまでの単純な拡大とその解説から、さらに高い機能を持つ仕組みを作ることができたと言える。

上述の「歴博甲本人物データベース」に関しては、データの検索についても工夫して、キーワードによる検索画面を作成し、企画展示およびインターネットによる利用を開始している。

企画展示においては、内容の読み解きパネル、地形図との比較、個別画像のスライドショーを作成するなど、いくつかの試みを行ない、今後の実践や、「歴博甲本」に限らない絵画資料の内容分析に基づく活用、さらにそれらの横断化ないし総合化、といった課題に道を開くことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 9 件)

①岩崎 均史「近世初期風俗画と洛中洛外図屏風」『HUMAN』vol.2、2012 年、19-27 頁、査読無し

②小島 道裕「洛中洛外図屏風—美しさの背後にあるもの—」『HUMAN』vol.2、2012 年、4-18 頁、査読無し

③末柄 豊「大永五年に完成した将軍御所の所在地に関する覚え書—洛中洛外図屏風歴博甲本の研究のために—」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第 54 号、2012 年、10-15 頁、査読無し

④岩崎 均史「歴博E本」と『京童』—洛中洛外図と地誌出版との関係—『歴博』No. 164、2011 年、16-19 頁、査読無し

⑤澤田 和人「男性の小袖丈—洛中洛外図屏風にあらわれた風俗—」『歴博』No. 164、2011 年、11-15 頁、査読無し

⑥岩永 てるみ「『洛中洛外図屏風歴博甲本右隻第二扇』後補部分の再現」『歴博』No. 164、2011 年、7-10 頁、査読無し

⑦小島 道裕「洛中洛外図屏風の系譜」『歴博』No. 164、2011 年、2-6 頁、査読無し

⑧小島 道裕「洛中洛外図屏風と描かれた公武関係—武士と『武士関係資料』のあり方をめぐって—」小島道裕編『武士と騎士—日欧比較中近世史の研究—』思文閣出版、2010 年、273-292 頁、査読無し

⑨Kimiyoshi Miyata, Yuka Inoue, Takahiro Takiguchi, Norimichi Tsumura, Toshiya Nakaguchi, Yoichi Miyake,” Application of an Imaging System to a Museum Exhibition for Developing Interactive Exhibitions” Journal of Electronic Imaging, Vol. 18, No. 4, 2009, pp. 043008-6

〔学会発表〕(計 5 件)

①宮田 公佳, 大藪 海, 小島 道裕「画像技術を用いた歴史情報の可視化とその展示応用」日本色彩学会視覚情報基礎研究会、2012 年 3 月 10 日

②Kimiyoshi Miyata, Umi Oyabu, Michihiro Kojima” Museum As An Integrated Imaging Device -Visualization of Ancient Kyoto Cityscape from Folding Screen Artifact- “ IS&T/SPIE’ s Symposium on Electronic Imaging, 2012 年 1 月 26 日

③川北 明広, 安達 文夫, 徳永 幸生, 杉山精「史資料画像の任意の対応点に基づく比較表示手法の検討」画像電子学会第 39 回年次大会、2011 年 6 月 25 日

④Kimiyoshi Miyata,” Digital Archive for Cultural Properties Based on the Imaging

Technology”, TELDAP International Conference 2010, 2010年3月4日

⑤Kimiyo Shi Miyata, “Workflow in Digital Archive for Historical Materials”, TELDAP International Conference 2010, 2010年3月3日

〔図書〕(計2件)

①『都市を描く—京都と江戸—』(企画展示図録) 国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館、2012年、240頁

②小島 道裕『描かれた戦国の京都—洛中洛外図屏風を読む—』吉川弘文館、2009年、186頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小島 道裕 (KOJIMA MICHIIHIRO)
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：90183805

(2) 研究分担者

安達 文夫 (ADACHI FUMIO)
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：30312540

井原 今朝男 (IHARA KESAO)
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：20311136

大久保 純一 (OKUBO JUN' ICHI)
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：90176842

玉井 哲雄 (TAMAI TETSUO)
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：80114297

松尾 恒一 (MATUSO KOICHI)
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：50286671

高橋 一樹 (TAKAHASHI KAZUKI)
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：80300680

宮田 公佳 (MIYATA KIMIYOSHI)
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：50342605

小瀬戸 恵美 (KOSETO EMI)
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：80332120

澤田 和人 (SAWADA KAZUTO)
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：80353374

(3) 連携研究者

末柄 豊 (SUEGARA YUTAKA)
東京大学史料編纂所・准教授
研究者番号：70251478

神庭 信幸 (KANBA NOBUYUKI)
東京国立博物館・保存修復課長
研究者番号：50169801

岩永 てるみ (IWANAGA TERUMI)
愛知県立芸術大学・美術学部・准教授
研究者番号：80345347